

悲観も突き詰めて行って、この上悲観のしようもなく
なると楽観に代ります。今まで泣き沈んでいた女が氣
が狂ったのでなく静かに笑い出すときがそれでありま
す。さればとて捨鉢の笑いでもありません。訊いてみ
ると、「ただ何となく」といいます。私はその心境を
しみじみ尊いものに思います。

「仏教人生読本」岡本かの子